

Title	田中惣五郎著 北一輝：日本的ファシストの象徴
Sub Title	Kita Ikki, by Sogoro Tanaka
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.5 (1960. 5) ,p.459(43)- 465(49)
JaLC DOI	10.14991/001.19600501-0043
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600501-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

(四) シンプレックス法は煩わしい。そのため可能なかぎり簡単な近似的な算法を用いるのがよい。ここでは、発電所群を、火力と自流水力というような二群構成やさらに三群構成に直し、その各々が正確にみだすパラメータと、余剰をもってみだすパラメータとを、費用の制約の下で較べて最適解を導く。

その原理を簡単に示すと、
 構成 q, r, s, t の解は行列式

$$\begin{aligned} & \parallel p_0, p_r, p_s, p_t \parallel \\ & \parallel p_0, p_0, p_0, p_0 \parallel \quad (p_0, p_0, p_r, p_s, p_t \text{ はベクトル}) \\ & \parallel p_0, p_r, p_0, p_t \parallel \\ & \parallel p_0, p_r, p_s, p_0 \parallel \end{aligned}$$

が、それぞれ行列式 $P = \parallel P_r, P_r, P_s, P_t \parallel$ と同符号のときは許容解。もし行列式

$$Q_i = \begin{array}{c|ccc} & a_i & b_i & c_i \\ \hline P & & & \\ \hline & g_0 & g_r & g_s & g_t \end{array}$$

の各々がそれぞれ p と同じ符号のときは最適解である。

【文献】

P. Massé; *Strategie et Decisions Economiques*.

M. Boiteux; *Le choix des equipments de Production d'énergie électrique*.

Revue de Recherche Opérationnelle, Jan, 1956.
 P. Massé et R. Gibrat;

Application des programmes linéaires aux investissements de production d'électricité (note présentée au meeting of the Institute of Management Sciences), à Los Angeles, Oct, 1956.

R. Gignet; *Les programmes d'équipement électrique considérés du point de vue l'économie appliquée*, Economie Appliquée, No. 1, 1951.

P. Massé et F. Bessière; *La programmation à long terme des investissements électriques*, Communications aux Journées d'étude de la Société pour l'accroissement de la productivité, Bruxelles, 1958.

F. Bessière; *Application de la dualité à un modèle de programmation à long terme*, Revue française de Recherche Opérationnelle, No. 12, 1959.

資料については、電力中央研究所、山岡春夫氏の多大の御好意をうけた。

書 評

田中惣五郎 著

『北 一輝——日本のファシストの象徴』

最近「十三階段への道」という映画が上映され、反響を呼んでいる。これには、第二次世界大戦の火つけ役、アウシュウィッツにおける残虐な大量殺戮の責任者として、ニュルンベルクの法廷で裁かれたヘルマン・ゲーリングをはじめとするナチスの指導者の傲然たる姿がうつし出される。彼らは「無罪」を主張して一步も譲らず、被告のひとりである将軍は、「われわれの失敗は、ただ二倍の石油と二倍の飛行機をもたなかったにすぎない」と断言してはばからなかった。われわれはこの映画によって、人間の徹底的に墮落しつくした姿、ナチズム特有のファナティズムと獣のような残虐性、そして計画的にして残忍な合理主義について深く考えさせられるとともに、かつての日本の「無責任の体系」ともいへべき軍国主義的ファシズムの矮小性に気がつくであろう。東京裁判において明らかにされたように、日本の軍国主義者やファシストは、その戦争責任をとりとせず、それを上へ上へと転嫁する。また当時の重臣その他の上層

部は、天皇および彼ら自身に政治的責任が帰するのを恐れて、つとめて絶対主義的側面を抜きとろうとしていた。「上官の命は即ち朕が命なりと心得よ」という軍人勅諭の文句からして、すべての戦争責任は、朕であるところ、天皇に帰すべきであるのに、天皇は戦争責任者として罪に問われなかったばかりか、誰に対しても責任を負っていないようである。ナチスの指導者が、敗戦の責任はこれを感じながら、しかし無罪を堂々と主張したのに反し、東条英機は、ウェッジ裁判長が「デス・バイ・ハンダー」と宣告したときに、頭を垂れて一礼したといわれる。卑屈な日本のファシストの姿ではないか。

現在のわが国には、もはやかつての軍国主義的ファシストは一応葬られたようである。しかし昔とはちがった形で、ネオ・ファシズムが大手を振って横行してはいないだろうか。こころみに、新聞を開いて、国会での質疑応答を注意して読んでみたまえ。岸首相や藤山外相の答弁は、日本国民にたいして政治の責任を負っているというよりは、アメリカ合衆国政府にたいして負っているような観がある。確乎たる信念があるように見えながら、その実、他国の政治動向のまにまに、浮草の如くに身をゆだねつつあるのが、われわれの祖国の運命を左右する政治家の態度であり、また一九六〇年の日本の政治の現状なのだ。彼らの答弁をきいてみるとアメリカの面子さえたてれば、あとはどうなってもいい、どうにかなるだろうというような祖国喪失症ともいへべきニヒリスティックなものを感しない

ではいられない。このような心理は、太平洋戦争をはじめるとき「清水の舞台からとびおるつもりで」という東条英機の心境と決して無縁ではない。東条はおそらく「あとはどうにかなるだろう」という気持で、何の勝算もなく戦争をはじめたのであろうが、今日国会での「新安保条約」についての岸首相の答弁には、こだけ何とかなれば、あとはどうにかなるだろうから、うまく云いくるめればそれでよいのだというようなファシスト的な無責任な態度がありありとうかがわれる。ここでは国民だけが馬鹿をみるわけであり、余命いくばくもない老朽政治家は別として、若いわれわれは安心していられない。いいかえるならば、一度死んだはずのファシズムは、永遠に死んだわけではないし、むしろ蘇生しつつあるのだ。かつてテオドル・ブリーヴィエは、第一次世界大戦後のドイツ革命の経過を対象として「カイゼルは去ったが、將軍たちは残った」という小説を書いたが、わが国では、カイゼルも將軍たちもそしてまたファシストも残っているのだ。

田中惣五郎教授の労作「北一輝——日本のファシストの象徴」はこのような現代日本の政治の動向に関心を払いながらまとめ上げられたものである。すなわち「はしがき」において、つぎのように書いておられる。「ネオ・ファシズムの気流が、しだいに色こく流れはじめている今日このごろ、いま一度この前のファシズム段階をふりかえてみることは、ぜひとも必要であるまいかと考えられる。歴

史はくりかえすとか、らせん状に回転するとかいわれるが、それはともかくとして歴史の中でうごく人間が同じ日本人であり、しかも時代がそう大してはなれていないとしたら、意識的無意識的に同じうごき方を動くであろうことが予想され、戒心を要するのである」と。

本書は、はしがき、第一章 人間形成、第二章 国体論及び純正社会主義、第三章 中国革命への参加、第四章 ふたたび支那革命のために、第五章 日本改造法案、第六章 北の活躍と沈潜、第七章 中間層の苦悶と動搖、第八章 対立と矛盾、第九章 二・二六事件、北一輝年譜から成っている。資料的研究として、今後のファシズム研究に大きな貢献をなすであろう本書に、わたくしは、克明な批評を加えるほどの専門家ではないが、日本のファシズムにいささか興味を感じるひとりとして、できるだけ忠実な紹介と読後感ともいうべきものをのべておきたいものである。

本書には「日本のファシストの象徴」という副題が附せられていることからも明らかのように、著者は、北一輝という典型的な日本のファシストの生涯から、ファシズム一般の問題を論じながら、そのなかで日本の政治的経済的諸条件、特有な精神的風土に規定されながら形成されたところの天皇制ファシズムを把握しようと努力されている。こう考えることによってはじめて、「日本のファシスト」および「象徴」という言葉が理解されるのではなからうか。

ファシズムとは何であるか。これについては、バーム・ダット

(Paine Duff) やディミトロフ (G. Dimitroff) あるいはスターリンなどの研究によって明らかにされたが、そのなかでもディミトロフのファシズムについての定義は有名である。一九三三年、ヒトラーによるドイツ国会議事堂の放火事件にさいして、犯人としてデッチ上げられたブルガリア共産党の指導者ゲオルギー・ディミトロフは、ナチスの法廷において、その事件が陰謀であることを暴露し、歴史的な勝利を獲ち得たのであったが、彼によれば、

「ファシズムは勤労大衆にたいする資本のもっとも残忍な攻撃である。」

ファシズムは荒れ狂う排外主義であり、侵略戦争である。

ファシズムは気狂いじみた反動であり、反革命である。

ファシズムは労働者階級および全勤労者のもっとも兇悪な敵である。」

ファシズム一般にたいするこの定義が、その本質をついているとすれば、「日本のファシストの象徴」としての北一輝の行動も、こうしたファシズム的思考様式から自由ではありえない。つまり、北一輝もやはり、独占資本のかいらいであり、気狂いじみた反動、排外主義者であり、全勤労大衆の兇悪な敵のひとりであったことにな

る。

ただ北一輝が、たんなる右翼ゴロ、大陸浪人とはちがって、ファシズム陣営の指導者、その黒幕的存在とみられたのは、彼が日本のファシズム運動において、その理論的最高峰に位する地位にあった

からである。最近われわれはその主著、国体論及び純正社会主義、支那革命外史、国家改造案原理大綱、日本改造法案大綱を手にいれることができたが、その内容の批判は別としても、日本ファシズムの經典としての彼の老大な著作は、われわれをひきつけずにおかないであらう。

明治中期における抵抗思想の芽生えは、ひとつはキリスト教的思想から、第二は文学上のロマン主義思想から、第三はトルストイ流の平和論から社会主義的思想への発展のなかからであったといわれている。しかし北一輝の生い立ちを説くと、これらとは別に、明治維新——自由民権運動の挫折——国権主義への転換という抵抗思想のゆがめられた系譜を辿ることができると思う。「明治維新の転換の中で、名主から戸長、戸長から町長と変っても、北家の地方的親方としての立場は変わらなかった。自由民権運動の波も、四五里の波の上を正確にわたってきた。とくに醸造業者北慶太郎としては、明治十四年の植木枝盛の『酒屋会議』に共鳴する酒造税増加の反対者であり、越後へ馬場辰猪らがきたといえは、本間一松らと海を渡って講演を聞きにいったりした。二、三年たっても子ができず、出してしまおうかなどといていたころ、長女が生まれ、明治一六年に長男輝次郎が生まれたのである」(一七頁)。彼の生家は、佐渡湊町でも旧家として知られた富裕な酒造りの家であったが、父が海運業に手を出したところから失敗し、明治三〇年彼が新設の中学校に入学した十五歳から、やがてそこを退学して十九歳のとき、上京して早稲田

大学の聴講生となつたころには、一家は全く没落してしまつた。一方彼は、一家の没落に苦しみながらも、日本帝国主義の勝利(日露戦争)や戦争反対を叫んで注目をあびた平民社の運動に、青年らしい反応を示した。われわれは、ここで、北をとりまく環境として、(一)自由民権運動の失敗とその国権主義への転換——偏狭な民族主義思想の抬頭と、中国および朝鮮にたいする蔑視——、(二)天皇制絶対主義の確立と帝国主義戦争——日露戦争——、(三)これに反対し抵抗する社会主義勢力——平民社を中心とする——の抬頭、これらの客観的諸条件に対して、生家の没落、北自身が性格的にもつロマンチズム——貴族趣味・英雄主義などの主体的条件を照応させるならば、後年のファシストとしての彼の出現も不思議ではない。ファシズムの大衆的基盤が、しばしば指摘されるように、独占資本主義の発展の過程で、没落を余儀なくさせられてゆく中産階級もしくは下層中産階級から派生する不満分子であるとするならば、北もまさにそうした階級的落伍者のひとりであつたといつては云いすぎであらうか。やがて彼が社会主義に興味を感じ、とくに社会主義者、幸徳秋水や無政府主義者、大杉栄と親交があつたといふことを、たとえばムッソリーニも、その若き日は、熱烈なサンディカリストであつたといふことなどと考え合せると興味深い。明治三十九年弱冠二十三歳をもつて出版された「国体論および純正社会主義」はこうした客観的および主体的な諸条件のなかで生まれたのであつたが、著者は、第二章において、この書の内容をきわめて詳細に紹介して

る。当時、福田徳三や河上肇のような新進気鋭の経済学者が、これを絶賛しもしくは高く評価したといわれているが、いまこれを読むに、論理が混乱しており、概念が不明確であるばかりか、感情的な非難攻撃が多く、結局何を云わんとしているのかよくわからないというほかはない。福田および河上両氏が、この書を絶賛したこと、もし事実であるとすれば、それはただ無名の一青年の努力と勇気にたいしてであり、また日本の経済学界がもっぱら翻訳紹介の時代であり、多分によせあつめつたものではあるが、大部のこの書に幻惑された結果にはかならない。しかし国体論と題し、天皇制をはじめ問題にしたことにむしろ本書の意味があるのであつて、朝憲紊乱を理由に発禁に処せられたのである。苦心の力作が発禁となり、生活はますます苦しくなつた。その結果、やがて中国大陸へわたり、革命に参加し、ファシストの巨頭たるべき地歩をきずくのであつて、第三章および第四章は、中国における彼の活躍についてくわしく論じられている。

本書を読んで感ずることは、北は一体、自分の職業の選択ということを実際に考えたのかどうかといふことである。彼が学者や政治家もしくは官吏など、いやしくも当時のインテリゲンチヤが望むような職にありつこうとしなかつたといふその行動のなかで、階級的落伍者(大陸浪人)というファシストに固有なものが見られはしないだらうか。すなわち著者は「支那浪人的な人にも、大別して、中国の権力者と交渉する日本政府の手足をつとめる人々と、こ

の権力を打倒しようとする中国の革命家たちと交渉をもとうとする人々とにわかれる。北輝次郎の場合は、社会主義者として国内的に活躍することがより本筋だと思われるが、社会主義的な面がややもすればあいまいであり、一般的風潮のため、個对社会、階級対階級の問題より、国家対世界、国家对国家の問題を重視するために、北は帝国主義的なものに多くの興味をもつに至つた。国権の革命主義者と自称するにいたつたのはそのためである」と(一一六頁)。

石川啄木は明治の末年を、「時代閉塞の現状」であると慨嘆したが、日露戦争後の猛烈な不景気と大衆の貧困化、足尾および別子の鉱山の暴動にみられるような階級闘争の激化、大逆事件に象徴される社会主義者にたいする酷烈な弾圧を契機として、おそらくは北は、狭苦しい日本、行きづまつた社会主義はこれをすてて、無智蒙昧にして四億の民が待つ動乱の中国大陸に、その野心と精力のほけ口を見出したのではなからうか。秘密結社中国同盟会なるものに入会したのは、明治維新の志士的な選民意識からであり、「国際的な孫文の思想よりは民族的な黄興、宋教仁にひかれたことは否みえない」(一二八頁)。一国の志士が、他国の革命に馳せ参じた例は多い。フランス革命に参加した民主主義者トム・ペインの如きは、祖国イギリスに蛇蝎のように憎悪されながら、自由・平等・友愛の精神を擁護したが、北の場合はペインとは異なつていた。すでに国権主義者となつていた北はブルジョア革命としての中国革命が、民主主義者にして民族主義者、孫文によつておこなわれるのを好まなかつ

た。そしてそこから孫文にたいする甚だしい憎悪と偏見が生まれる。著者はこれについて、北と宋教仁との深い結びつき、これに反して北の孫文にたいするいわれの無い偏見と猜疑心を、両者(つまり孫文と宋教仁)の「東洋的学問と西洋的学問」「国際的と国家的」というへだたり、この二人の指導者のうち、盟友としての宋教仁が暗殺されたことによつて、孫文に疑いをかけたことなどから、ますます孫文嫌いがひどくなつたとのべているが(二六八—二六九頁)、根本的にはやはり、中国民族ブルジョアジーの利益を代表する孫文と、中国の植民地化をねらう日本帝国主義の走狗となりつた北との対立として把握すべきではなからうか。そうでないならば、われわれは、のちに中国侵略の理論的支柱となつた北のファシズム理論について理解し難くなるであらう。

中国革命が進展し、中国の権益と市場獲得をめぐる列強の競争がはげしくなる一方、二一カ条問題を契機として日本の中国における形勢は不利となつた。さらにその後革命の主体がすでに労働者および学生の手につつていつた第三革命の時期になると、排日抗日運動がはげしくなり、その上、日本国内に社会的経済的危機が激化したため、空しく日本へ帰らざるをえなかつた。中国民衆の革命的な昂まりのまえに、北の明治維新的志士気どりは敗北しなければならなかつたのではないか。大体において、当時のファシストが、「シナ」と呼ぶとき、それは共産主義の防波堤として、中国を日本帝国主義の支配下におこうとする露骨な意図のあらわれであり、「日本の愚劣

は、米国の称える『不併土不賠償』の主張を極力支持せずに、鼻糞ほどの土地をとり、『金を貸せば必ず利子を取らねばならぬ』という質屋の禿頭』のような考え方(二二六頁)と云って、慨嘆したのは、一見平和主義者で中国の友であるかのような口吻であるが、実はさにあらず、『日本は米国に向つて亜弗利加の独領占有を約束し、米国は日本に向つて赤道以南の南洋独領を約束する。然らば青島争奪の醜態なく、マニラ、カロリンの渺少なる獲物に非ざるのみならず、欧州の舞台に於て真個の強国たる認識を得るのであった』というおどろくべき主張を展開するのであった。中国における日本の政策の拙劣さに憤慨した北は、日本の国家改造に深く想いをいたすようになる。第五章は、中国の革命に希望を失った北が、いかにして、日本のファシストの巨匠となつたか、ファシズムの経典といわれた日本改造法案の内容についてふれている。

国家改造の手段の第一として、天皇の大権を發動して二年間憲法を停止し、『兩院ヲ解散シ、全国ニ戒嚴令ヲ布ク』ことからはじまり、天皇は『国民の総代表、国家の根柱』であり、また、在郷軍人会は、ロシアおよびドイツの労兵會議と比較してより合理的であり、国家改造によって私有財産を一家につき『老百万円』、私企業については『老千万円』を限度として、そのほかは国家が没収したのちは、財郷軍人組織をして秩序の維持、私有財産の調査にあたらせるといふのである。そしてついに、『國際間ニヲケル無産者ノ地位ニアル日本ハ、正義ノ名ニ於テ』戦争をはじめの権利があるという

に至るのである。

大正十二年、同志大川周明との間に不和が生じたため、ファシストの団体、猶存社は解散した。その後昭和五年頃から再び大川と連絡しつつ、陸海軍青年将校たちの間にその改造思想を宣伝し、これによって、二・二六事件をひきおこす種が彼によって播かれたことになるのである。死刑に処せられるまでの彼の態度は、日本のファシストとしてまことに象徴的であつたことを、著者はつぎのように指摘する。『北がファシスト全体の上に座しているため、そのなかの部分が強引に動きはじめたとき、その方向に引きずられて行くのだと解すべきではなからうか。一種の『象徴』ともいふべく、それはかれの超的な態度と相反する点で、いささか天皇の立場と相似たるものといえよう』と。その意味では、晩年、三井財閥から生活費を恵まれるというファシスト特有のデ・クラッセの生活をおくったにもかかわらず、彼自身も日本のファシストとしての悲劇を背負っていたといふことができる。

以上において筆者は、本書の紹介を終るが、最後に、卒直な批判を読後感としてのべるであろう。本書は資料的な研究としてすぐれた価値をもっているとしても、やはり著者は、さきの「吉野作造—日本のデモクラシーの使徒」や「幸徳秋水」と同じく、北一輝の人をやや偶像視しているかのような感がある。もちろん文章のいたるところに批判はみられるのであるが、全体としてやはり北一輝の生涯を美しく描きすぎてはいないだろうか。もちろん筆者は、北一

輝が、いわゆる大陸ゴロとちがつて、理論的背骨をもって貫かれており、ファシストとしてよりは、あるいは人間として一偉材であつたことを否定するものではない。悲劇の主人公としての北一輝の心情に同感し、彼の生涯の悲劇性を強調する気持はよくわかるが、文学としてならともかく、やはりファシズムの本質の理論的究明という課題に真剣にとりくむ社会学者であるならば、そこにきびしい理論的反省がなされねばならないのではなからうか。(未來社、五八〇円)

- (1) 丸山真男「現代政治の思想と行動」上巻、八三頁。
- (2) デイミトロフ、田島昌夫訳「獄中からの手紙」(国民文庫版)
- (3) 北一輝著作集、第一巻および第二巻(みすず書房、一九五九年)
- (4) 私の十代—秋田雨雀、抵抗思想の芽生え—朝日新聞所載(日附忘却) —

—一九六〇・三・一五—(飯田 鼎)

チェックランド

『発展と進歩』

Checkland, S. G. 'Growth and Progress: The Nineteenth-Century View in Britain', Economic History Review, 2nd. Series, Vol. XII, No.1, Aug. 1959, pp. 49-62.

書 評

発展の過程は人間の決断から独立して起るものではない。ある程度まで歴史は人間自身によって構成される。従つて人間は歴史の過程における単なる通過者ではない。自律的な存在者として決断し、未来に対して責任をおう。歴史を推進するのは人間にほかならないのである。

しかし古典学派の祖スミスにとって、人間はかかるものとして映じて来ない。逆にそこでは、人間は行動する存在者ではなく、ものが彼に対して起つて来る受身の存在者とみなされていた。そうした人間把握のうえに立って、スミスは発展の過程をどう理解しようとしたか。またリカードをへて、ミルにいたり、人間をめぐる理解の変化から、社会進歩に対する見解がどう変わっていったか。実にその過程がここで紹介する小論の内容であった。以下にそれを整理し、古典学派理解の一助にしたいと思う。

二

周知の如く、スミスは人間の行動を利己心の発動とみた。しかし利己心から発する人間の行動によって、社会が急速な変化を続けるとは思わなかった。個人の旺盛な活躍にもかかわらず、社会の発展は一定の限度内にとどまる。スミスはそう信じた。彼のこの主張の背後には、彼固有の人間観があつた。